

(研究ノート)

イベリア大航海時代の〈文書統治〉と 「日本スペイン交流 400 周年」

——シマンカスとインディアスの二大総合文書館での特別展示——

川 畑 博 昭

はじめに—— “*Verba volant, scripta manent*” (言葉は飛び去り、書かれたものが残る)

2013 年と 2014 年は「日本スペイン交流 400 周年」(AÑO DUAL ESPAÑA – JAPÓN 400 AÑOS DE RELACIONES) を記念する 2 年間である¹⁾。これは、1613 年に伊達正宗の家臣・支倉常長が率いた慶長遣欧使節を起点としているが、振り返ってみれば、何もかもが異なる両国が、400 年間の時空を超えてなお今日に至るまで、「君主制」の国家形態を「維持」している点に、「共通点」を見て取ることはできるだろう。もとより、「維持」の意味は、両国の中世・近現代の歴史的文脈によって大きく異なる。武家支配を基本とする封建支配をつくり上げていた大航海時代の日本は、「近代化」を契機に、形式的には唯一の君主を戴く「帝国」となり、現在の「天皇制国民主権」の国家形態へと至っている。スペインは「統一王国」の君主の下で、大航海による世界制覇を目論みながら、やがては 2 度にわたる共和制を経験させる「近代」を経て、現在の議会君主制を確立した²⁾。国家形態論としては、現在の日本の「天皇」とスペインの「国王」を以って両国を「君主制」と見なすことは、的外れとまでは言えないものの³⁾、現形態に至るまでの歴史過程に照らせば、彼我の違いには十分に自覚されなければならない。

さて、400 年にわたる君主制の存在と関わって、当該記念事業の 1 つとして、ヨーロッパに日本の存在が知られる歴史的な出来事を紹介する事業が注目され

た。16世紀末から17世紀初頭にかけて、日本から東西それぞれのルートでヨーロッパへ渡った2つの使節団——1588年の天正遣欧使節と1613年の慶長遣欧使節——である。そこで、大航海時代のイベリア諸国（スペイン・ポルトガル）の対外関係に関する膨大な史料を保有する2つの主要な国家機関⁴⁾——在バリャドリッド・シマンカス総合文書館（Archivo General de Simancas——以下、シマンカス文書館）と在セビーリャ・インディアス総合文書館（Archivo General de Indias——以下、インディアス文書館）——が特別展示を開催した。

「交流400周年記念」にちなんで、いずれの展示も1613年の慶長遣欧使節に焦点を当てているが、その方法においては、それぞれの文書館の性格による相違が見られる。シマンカス文書館が、国家の統治手段としての情報管理を担うものとして、1588年の勅令によって本格始動するのに対して、それから約200年後の1785年に設置されるインディアス文書館は、スペインの中南米植民地（インディアス）に関する行政や司法の分野における統治関連文書の保存を主たる任務とする。図式的に見れば、王権と一体となったシマンカスが「中央権力」の視点を前面に押し出すのに対して、植民地からの情報を一括管理するインディアスのいわば「周辺」の立場がある。比喩的には、「スペイン系君主体制の番人」に対する「新大陸スペイン系植民地の証人」と表現することができるだろう。それゆえ、シマンカス文書館は、スペインのみならずポルトガルも含み、さらにはイベリア半島以外の支配領域も包含する「スペイン系君主体制（Monarquía Hispánica）⁵⁾」の文脈において日本との関係（遣欧使節）を捉えるのに対して、インディアスの場合には、慶長遣欧使節団が同文書館の所在地であるセビーリャ市に滞在した事実との関係性も強調しつつ、同使節団に関わる膨大な史料に着目する。

以下では、両文書館の展示内容を紹介・概観しつつ、それぞれの文書館の歴史的性格を踏まえながら各展示の特徴をつかみ出し、大航海時代のヨーロッパから見た日本の位置づけを模索することにする。そのうえで、展示が示す「君主制」にとっての「文書統治（gobierno a través de los archivos）」の意味と、日欧史料による研究対象の相対化の課題に言及してみたい⁶⁾。

1 シマンカス総合文書館——「スペイン系君主体制の番人」

(1) 沿革と概要

マドリッドの北西約 190km のところにあるバリャドリッド市は、マドリッドが正式な首都となる以前の移動宮廷の時代の王宮所在地となった古都である。シマンカス総合文書館は、このバリャドリッド市中心部から南西に約 14km の地点に位置する。そこでは、16 世紀から 18 世紀までのスペイン系君主体制時代の統治機関によって出された全文書が保管されており⁷⁾、それらを管理・保存する任務は、国王に直接任命される文書管理官 (archivero) に与えられていた。建物そのものの設計には、当時のスペインで高名なファン・デ・エレラ (Juan de Herrera) やフランシスコ・デ・プラベス (Francisco de Praves)、さらにはフランシスコ・デ・モラ (Francisco de Mora) といった建築家が関わっている。

シマンカス文書館の設置は、「歴代のカスティーリャ国王の正当な権利を証明する文書保存」という明確な目的の下に、カルロス五世によって着手され、文書支配の十全たる機能は、息子のフェリペ二世によって完成された。ここには、「文書による統治」の重要性への高い意識がうかがえる。カルロス五世は、「王室財産に関わる文書を所持する一人の者 (“un tenedor del archivo de las escrituras tocantes a nuestro Patrimonio Real”）」を任命し、要塞の内部の格天井の中に保存すべきだとしたが、文書保存の重要性をいっそう強く理解していたフェリペ二世は、王室財産に関連する文書のみならず、「国王と家臣」に関わるあらゆる文書の保存も命じ、1588 年には、近代的な文書館に関する最初の法令とされる「シマンカス文書館の管理のための訓令 (Instrucción para el gobierno del Archivo de Simancas)⁸⁾」を出すほどであった⁹⁾。



シマンカス総合文書館
[2013年11月8日撮影]

以上のように、「スペイン系君主体制の統治における保存媒体と権力手段」として設置されたシマンカス文書館には、世界の記憶のたぐいまれな保管庫がある。同館の説明によれば、それは、「スペイン系君主体制は所有する領土だけではなく、みずからのイメージと権力を強化・拡大しようとするあらゆる空間に関わって行った」からであり、その意味で、この君主国にとって「無関係なものなど何もなかった」のである。ユーラシア大陸最西端の君主国にとっての日本の存在も、この文脈で説明されるだろう¹⁰⁾。

(2) 特別展示「日出ずる国を求めて——天正遣欧使節団（1582年～1588年）と慶長遣欧使節団（1613年～1617年）」

シマンカス文書館は2013年7月13日から12月末まで、特別展示「日出ずる国を求めて——天正遣欧使節団（1582年～1588年）と慶長遣欧使節団（1613年～1617年）」を開催した¹¹⁾。シマンカスの展示数は54点と、次に見るインディアス文書館の半分以下であった。しかし規模は小さくとも、的確な原本史料を用いているゆえか、同館の展示目録が述べる通り、展示の主題を「簡潔ながら

意味ある (de forma sucinta pero significativa)¹²⁾」方法で、むしろより鮮明にしていたように思われる。そこでは、「日本のヨーロッパへの門戸開放と、親密性と抵抗、接近と対立で特徴づけられる日本とスペイン系君主国との関係にとって、決定的かつ複雑な 1 世紀 (1550 年～1650 年) において、慶長遣欧使節が唯一だったわけではない¹³⁾」との立場から、慶長遣欧使節に先立つ天正遣欧使節の意味を説き起こし、逆に慶長遣欧使節の意味を浮き彫りにしている。その方法は、単に展示物による事実の描写という以上に、2 つの遣欧使節を大航海時代史上に布置することで、日本からの「遣欧」の試みが、当時のヨーロッパの文脈において有した歴史的意味を明らかにしようとするものである¹⁴⁾。

展示は、2 つの遣欧使節団が派遣された時代区分に応じて、「天正」と「慶長」ごとに構成されており、両者に同程度のスペースと史料が割かれている¹⁵⁾。強いていえば、前者の展示のほとんどが文字史料や図版に依っていたのに対して、後者の場合は、支倉一行が日本から持ち込んだ刀や鎧兜などの品々を加えた点に、両部門の違いが見られた。概要は次の通りである¹⁶⁾。

〈展示構成一覧〉

第Ⅰ部 天正遣欧使節	
1	ポルトガル (港町地図、駐ヴァチカン大使宛書簡など)
2	イエズス会 (同会士による国王宛書簡など)
3	フェリペ二世 (遣欧使節団の国王謁見に関する書簡など)
4	グレゴリオ八世 (遣欧使節団の法王謁見に関する報告書簡など)
5	シクスト五世 (遣欧使節団参列の新法王戴冠騎馬行進参列、法王謁見に関する報告書簡など)
6	地図上の日本 (遣欧使節のイタリア国内訪問に関する報告書簡など)
7	帰途 (遣欧使節団の帰路報告に関する書簡など)
8	失望 (日本国内の迫害状況に関する書簡や図版)
第Ⅱ部 慶長遣欧使節	
1	新たな仲介者たち (日本の迫害状況やフィリピンから日本への渡航許可に関する書簡など)
2	新航路 (日本・フィリピン・ヌエバ・エスパーニャ間の通商に関するスペイン・日本側政府関係者書簡など)
3	ヌエバ・エスパーニャからセビーリャへ (ヌエバ・エスパーニャ港湾図)
4	セビーリャ (セビーリャからのソテロ神父による国王宛書簡など)
5	フェリペ三世との謁見 (伊達正宗および支倉常長の書簡など)
6	パウロ五世との謁見 (支倉常長の法王拝謁図など)
7	遣欧使節編年史 (使節団同行のスペイン人歴史家による叙述、支倉肖像画など)
8	徒勞 (国王に日本での布教とセビーリャ出航許可を求めるソテロ神父の書簡など)

天正遣欧使節は、当時、イエズス会東インド管区のイタリア人巡察師であったアレッサンドロ・ヴァリニャーノ（Alessandro Valignano）が計画・引率した宗教的試みであったことはよく知られている¹⁷⁾。だからこそ、第1部の展示においては、ポルトガル人の航路を日本からインド・アフリカ南端と逆に辿ることでポルトガルに到着したと併せて、遣欧使節の真の立役者であったイエズス会が取り上げられる（1. ポルトガルおよび2. イエズス会）。続いて、使節一行がスペイン国王（3. フェリペ二世¹⁸⁾）をはじめ、ローマ法王の退位と即位に際会したことによって、2人のローマ法王（4. グレゴリオ八世および5. シクスト五世）への謁見が果たせるなど、天正遣欧使節の4名の少年たちがヨーロッパのキリスト教の荘厳さを現地で体感することによって、帰国後の布教活動をさらに円滑に進める任務を負っていたことが示される。そして、フェリペ二世がイタリア各都市に駐節させていた各大使からの報告文書によって、ヴァチカンやイタリア各都市において使節一行がいかに歓待されたのかが詳しく伝えられ、ヨーロッパの地図上に日本の存在を刻印づけたことがわかる（6. 地図上の日本）。とはいえ、使節一行が帰国する1年前の1587年には、豊臣秀吉による伴天連追放令が出され、日本国内ではキリシタン迫害の動きが強まりつつあった。「失望（Desencanto）」の見出しの第1部の最後は、1597年2月5日の長崎26聖人殉教図によって、ヨーロッパにおける好意的反応との対照性が克明に浮かび上がる仕掛けになっている。

約4半世紀後の慶長遣欧使節が第Ⅱ部として続くが、展示では、第1部末で明らかになる日本国内のキリシタン迫害状況との連続性は維持されつつ、こうした時代状況下での、日本スペイン関係を確立すべく奔走したフランシスコ会士の動静が示される（「1. 新たな仲介者たち」）。それを可能とした太平洋航路（日本－マニラ－ヌエバ・エスパーニャ〔現在のメキシコ〕）にふれることによって（「2. 新航路」）、アカプルコ（メキシコ）からスペイン（セビーリャ）へ到着し、セビーリャ滞在を経て、スペイン国王との謁見のために北部のマドリッドへと国内を移動したのち、バルセロナを通過して、地中海を渡りローマ法王への謁見を果たす、慶長遣欧使節の足跡が描かれる（「3. ヌエバ・エスパーニャからセビーリャへ」～「6. パウロ五世への謁見」）。最後に、これらを編

年的に示しつつ（「7. 遣欧使節編年史」）、スペイン国王やローマ法王から宗教目的にも通商に対しても支援は得られず、この使節一行がさしたる成果もないまま、「手ぶらで（con las manos vacías）」帰国しなければならなかった結末が描かれている（「8. 徒労」）。

こうして、シマンカス展示は、2つの遣欧使節の「対照性」から、16世紀末にイベリア半島を経由して現れた「ヨーロッパにおける日本」を描き出そうとしている。そこでの日本に対する捉え方は、「日本がスペイン系君主体制の支配領域であったことはかつて一度もなかったが、だからといって日本が、この帝国のあずかり知らぬところで（a sus espaldas）存在していたわけでもなかった¹⁹⁾」との表現に端的に示されている。しかし同時に、1580年のスペインとポルトガルの王権の統一によっても解消されなかったイベリア両国の対立は、イベリア諸国の膨張主義（expansionismo ibérico）の文脈のなかで、「スペイン系君主体制内にある遠く離れた2つの帝国の合流点（punto de confluencia）」であり、例外的な性格を有する場所²⁰⁾としての日本に現れていた。2つの遣欧使節が、ポルトガルを中心とするイエズス会と、スペインを中心とするフランシスコ会の、同一の宗教上の異なる宗派によって担われていたことは、そのことを示しているだろう。2つの宗派はしばしば、日本の布教政策において対立したからである。こうして、シマンカス展示において2つの遣欧使節は、単なる国際外交として以上に、政治・宗教・文化的な射程をもつ事業として、日本国内の権力動向に大きく左右されながら、徹頭徹尾「権力が相互に入り乱れる複雑な枠組み（complejo marco de interacción de poderes）」としてえがかれるのである²¹⁾。

2 インディアス総合文書館——「新大陸スペイン系植民地の証人」

（1）沿革と概要²²⁾

マドリッドの南西約540kmのセビーリャ市に置かれているインディアス総合文書館は、1785年当時、シマンカス、カディス、セビーリャに点在してい

たスペイン中南米植民地（インディアス）に関する文書を一箇所に保存する目的で、カルロス三世の希望によって設立された。その後、インディアス評議会（Consejo de Indias）、通商院（Casa de la Contratación）、各領事館（consulados）、各省（secretarías de Estado y de Despacho）などが保管していた文書も統合し、あたかも「新大陸スペイン系植民地の証人」のような機能を担ってきた。文書館そのものは、フェリペ二世の統治下の1584年～1598年に、シマンカスを設計したファン・デ・エレーラの設計に基づいて建築された、セビーリャ商品取引所（Casa Lonja de Mercaderes de Sevilla）の建物内に置かれている。

今日、インディアス総合文書館は43,000点以上の文書を保管し、それらの文書は、全長8キロメートルの保管棚に置かれ、8,000万ページにわたる原史料から成る。文書が網羅する地域の範囲は、南米大陸の最南端の島嶼（Tierra del Fuego）からアメリカ合衆国南部、さらには東アジアのスペイン領であるフィリピンにまで及ぶ。領域的には、政治史、経済史、社会史、思想史、教会史、美術史など多岐にわたり、新大陸の発見の時代から、開拓、新世界の征服、独立に至るまでの時期を網羅している。まさに「中南米研究のメッカ（meca del



インディアス総合文書館
[2013年7月8日撮影]

americanismo)」である。

(2) 特別展示「日本からローマへ、キリスト教の陽光を求めて——支倉使節団 (1613 年～ 1620 年)」

インディアス総合文書館の展示は、2013 年 6 月 14 日から 8 月 15 日まで開催された。展示物の総数は 131 点で、展示棚 (Vitrina) ごとに 10 のテーマに分けられた文書や図版などは 121 点に及んだ。これ以外に 5 つの陳列ケース (Expositor) が置かれ、刀類や鎧兜、重箱など、遣欧使節団とともにイベリア半島に持ち込まれた日本の諸物 10 点が展示されていた。そのなかには、1822 年 3 月 22 日に駐箚フランス特命全権公使・井田讓がセビーリャ市文書館を訪問した際に、支倉常長の書簡の翻訳をした旨の記録も存在した。

〈展示構成一覧²³⁾〉

展示棚	テーマ
第 1 展示	未知の日本から天正遣欧使節へ (1～11)
第 2 展示	豊臣秀吉の死までの日本スペイン関係 (12～23)
第 3 展示	ヌエバ・エスパーニャ航路の開始 (24～32)
第 4 展示	ロドリゴ・デ・ビベロとアロンソ・ムニョスの使節一行 (33～42)
第 5 展示	セバスティアン・ビスカイーノと慶長遣欧使節のはじまり (43～54)
第 6 展示	慶長遣欧使節——アカプルコからセビーリャへ (55～71)
第 7 展示	慶長遣欧使節——セビーリャでの支倉 (72～83)
第 8 展示	慶長遣欧使節——セビーリャから王宮へ (84～97)
第 9 展示	慶長遣欧使節——ローマの道 (98～110)
第 10 展示	ローマから日本へ——遣欧使節の不運な結末 (111～121)

展示の大部分が慶長遣欧使節に充てられており、一行の足跡が一目でわかる²⁴⁾。フィリピンを拠点とするスペインは、マニラとヌエバ・エスパーニャとを結ぶ太平洋航路を発見したことを奇貨として (第 3 展示)、これを利用したスペインと日本との通商の可能性を模索し (第 4 展示)、使節派遣の決定をおこなう (第 5 展示)。使節一行は奥州の月の浦 (現石巻市) を出航し、メキシコのアカプルコを経て、スペインのセビーリャへ到着し (第 6・第 7 展示)、その後セビーリャからマドリッドに北上し、スペイン国王に謁見する (第 8 展示)。そこからローマへ向かい (第 9 展示)、再び同じ経路をたどりセビーリャから帰路の途に就く (第 10 展示)。それゆえ、天正遣欧使節から慶長遣欧使節

までの日本とスペインとの関係についての箇所（第1・第2展示）は、わずかに本展示のイントロダクションに過ぎない。シマンカス展示との大きな違いは、ここにある。

慶長遣欧使節から400年を記念する展示の趣旨からすれば、インディアス展示の構成がこの使節一行に焦点を当てたのは当然であろう。展示目録に示された趣旨には、大航海時代史に対する次のようなインディアス文書館の認識が読みとれる。すなわち、日本と最初に接触を図ったヨーロッパ人をポルトガル人とする前提が置かれている。そのことを踏まえて、1565年にスペインの活動拠点がフィリピンに置かれたことにともない、ようやく日本とスペインとの関係が、とりわけ日本の国内政治状況に依存するかたちで、友好と対立のはざまを行き来するものとして捉えられている。この関係が布教と交易の2つの目的をもち、とりわけ後者については、日本がマニラに拠点を確立することに加え、スペインやヨーロッパと直接的接触を図ろうとしたのに対して、スペインは日本との交易からポルトガル人やオランダ人を排除しようとしたと見る²⁵⁾。慶長遣欧使節の成果については、インディアス展示も「7年もかかったこの長い外交的な波瀾は、初期の目的を達成することはなかった」と、シマンカスと同様の評価を下すものの、「19世紀以前のヨーロッパにおける稀少な日本人の直接の接触の1つを意味した²⁶⁾」と、その歴史的意義を付言する。したがって、ここでは、地理的にはかけ離れた2つのスペイン系植民地——フィリピンとヌエバ・エスパーニャ——が太平洋航路によって結ばれることによって開かれた日本との接触、という点に主眼が置かれている。この展示に「中南米のスペイン系植民地の証人」としての強いアイデンティティが感じられ、そこにシマンカスのような「中央権力」の視点が見られないのは、両文書館の歴史的 성격からすれば、驚くにあたいすることではないのだろう。

おわりに——「君主制」についての「文書統治」

「戦国日本」と「大航海スペイン」との「交流」は、キリスト教の布教と南蛮貿易を通じて開始されたものの、1614年の徳川幕府による禁教令によって、

その後200年以上途絶えた。日本の「鎖国」の開始時期とも符合する、周知の事実である。「交流」の再開は、1853年の日本の「開国」を受けて、1868年11月12日に両国の間での「大日本国西班牙国条約書」の締結を待たなければならなかった²⁷⁾。スペイン・ポルトガルのイベリア諸国が世界を二分した「大航海時代」もまた、日本との国交断絶と時をほぼ同じくして衰退し、オランダやイギリスがそれに代わり、いわゆる「近代化」を先導する時代が到来する。それだけに、シマンカスとインディアスによる2つの展示は、1世紀というわずかな時間のなかで、日本とスペインとの「交流」の時代を凝縮して示す意義深い試みであった。

その「意義深さ」は、同時にまた、シマンカスとインディアスが、大航海によって世界を駆けめぐったスペイン系君主体制にとって、「情報」が生命線となる「文書統治」の実相を示した点にある。収集・分析され、蓄積・保存された夥しい数の情報文書のうち、とりわけ日本とスペインに関するものについて、スペインの近代史家エミリオ・ソラは「通達の文献(literatura de avisos)」と名づけ、「情報は統治技法と国家の存在理由の基礎である」と述べ、国王の目となり耳となる諜報活動の重要性を説いた²⁸⁾。さらには、近代スペイン語文法書の先駆者であるアントニオ・ネブリハ(Elio Antonio de Nebrija, 1441年～1522年)の有名なプロローグの一節²⁹⁾を引きながら、情報の必要性が帝国にとっては内在的なもの(connatural)であり、言語(lengua)は、この側面に密接に関わっていることを指摘した³⁰⁾。

日本について見れば、布教や交易のために来日していた宣教師や商人から、スペイン国王へ送られた報告書や書簡は数知れない。地理的かつ言語的制約ゆえか、日本の大航海・キリシタン研究において、これらの史料は長らく参照されることが少なかったが、日本ではかえりみられることのなかった事実が、欧文史料から明らかになる可能性も否定はできない³¹⁾。日本の戦国時代におけるイベリア関連の日本語史料と、スペイン帝国の下での大航海時代イベリアにおける日本に関する欧文史料との「交流」が必要不可欠となる所以である。こうした「学問的大航海」が存在して初めて、「大航海時代の戦国日本」の正確な位相は把握される³²⁾。「日本スペイン交流400周年」記念事業として開催され

たシマンカス文書館とインディアス文書館の展示が、このような研究上の可能性を拓く契機となりうる点は、間違いないであろう。本稿冒頭で示した「君主制」をめぐる彼我の違いと類似点もまた、同様の研究方法と成果の蓄積から導出されなければならないはずである。

注

- 1) 2010年の日本とスペインの首脳レベルでの合意に基づいており、2013年6月から2014年7月の間に記念事業をおこなうこととされている。その目的は、「文化事業に加え、政治、経済、科学技術、観光、教育等の幅広い分野で交流事業を実施することにより、日本とスペインとの相互理解の促進と二国間関係の新たな展望を拓く契機とすること」にある。本交流記念事業の詳細については、参照、特設のホームページに詳しい（<http://www.esja400.com/jpn/> [2014年2月21日閲覧]）。
- 2) 15世紀末の国家統一から現在に至るまでのスペインの王権を通史的に取り上げながら、スペインの各時代の王制の特徴を描くものとして、参照、川成洋・坂東省次・桑原真夫『スペイン王権史』（中公選書、2013年）。
- 3) 筆者は、「日本スペイン交流400周年」の一環として、2013年11月にスペイン上院で開催された「比較憲法セミナー日本の君主制とスペインの君主制」で報告する機会を得た。このセミナーは、両国を「君主制」として位置づけ、これに関する憲法規定の異同を明らかにすることを目的としたものであったが、国家形態として天皇を擁する日本の国家体制を「固有性＝天皇制」と「普遍性＝君主制」の枠組みで相対的に認識する機会として、的確な試みであった。以上の点に関わる筆者の認識については、川畑博昭「『神』を宿す『天皇制国民主権』の現在——『日本スペイン交流400周年比較憲法セミナー』に際して考えた君主制論」愛知県立大学大学院『国際文化研究科論集（日本文化専攻）』第15号（2014年）[近刊]を参照されたい。
- 4) スペイン教育文化スポーツ省のホームページ（<http://www.mcu.es/archivos/>）によれば、スペインの国立文書館（Archivos Estatales）はこの2つ以外には次のものがある。①アラゴン王室文書館（Archivo de la Corona de Aragón）、②バリャドリッド王立高等法院文書館（Archivo de la Real Chancillería de Valladolid）、③国立歴史文書館（Archivo Histórico Nacional）、④行政総合文書館（Archivo General de la Administración）、歴史記憶文書センター（Centro Documental de la Memoria Histórica）、⑤国立歴史文書館貴族部門（Sección Nobleza del Archivo Histórico Nacional）、⑥中央文化文書館（Archivo Central de Cultura）、中央教育文書館（Archivo Central de Educación）、⑦アラバ県歴史文書館（Archivo Histórico Provincial de Álava）、⑧ギブススコア県歴史文書館（Archivo Histórico Provincial

de Guipúzcoa)、ビスカヤ県歴史文書館 (Archivo Histórico Provincial de Vizcaya)、⑨文書情報管理センター (Centro de Información Documental de Archivos - CIDA)、⑩文書複製局 (Servicio de Reproducción de Documentos - SRDAE)。

- 5) これは、中世から近世にかけてのスペインの君主制を中枢としたあらゆる版図を含み込んだ概念であるが、これを「帝国」との関係で検討したものとして、五十嵐一成「〈研究ノート〉『帝国』とモナルキア・イスパニカ (上) (中) (下)」札幌大学経済・経営学会『経済と経営』第34巻第1号 (2003年6月)、111～125頁、同第2号 (2003年9月)、107～126頁、第36巻第1号 (2005年11月)、141～149頁がある。

- 6) ここに「日欧史料」という場合、もとよりイベリア諸国に限られるわけではない。例えば、日本とイギリスを比較対象とした重要な研究として、鶴島博和・春田直紀編著『日英中世史料論』(日本経済評論社、2008年)がある。

しかし本稿の問題意識は、中世から近世にかけてのスペイン系君主体制が、日本が初めて接触したヨーロッパの国家である点に加え、この体制下で日本やアジアに関する膨大な記録が残されたという意味において、イベリア諸国との比較の視点からの日本研究という点にある。

- 7) 以上の叙述については、同文書館のホームページ (<http://www.mcu.es/archivos/MC/AGS/Presentacion.html>) [2014年2月21日閲覧]を参照した。
- 8) これについては、シマンカス文書館元館長ホセ・ルイス・ロドリゲス・デ・ディエゴ氏による緻密な研究がある。Véase, José Luis Rodríguez de Diego, *Instrucción para el gobierno del Archivo de Simancas (Año 1588) : Estudio por José Luis Rodríguez de Diego*, Ministerio de Educación y Cultura - Dirección General del Libro, Archivos y Bibliotecas - Subdirección General de Archivos Estatales, 1998. 現館長のフリア・テレサ・ロドリゲス・デ・ディエゴ女史は彼の妹であり、右文献は、2014年1月7日に筆者がシマンカス文書館を訪問した際、同女史より恵投されたものである。
- 9) 以上の記述は、シマンカス文書館の案内しおりに依拠している。これは、前掲のホームページからもダウンロード可能である [2014年2月21日閲覧・確認]。
- 10) Archivo General de Simancas, *En busca del Sol Naciente: Las embajadas Tenshō (1582-1588) y Keichō (1613-1617) Catálogo de la exposición*, 2013, p. 1
- 11) 筆者はすでに、2013年11月8日に同館を訪問していたが、2014年1月6日と7日に再訪した際にも、展示は継続されていた。
- 12) Archivo General de Simancas, *op. cit.*, p. 1.
- 13) *Ibid.*
- 14) 筆者が2度にわたるシマンカス文書館訪問の際、この感想をエドゥアルド・ペドゥルエロ (Eduardo Pedruelo) 前館長 (2013年7月8日) とフリア・ロドリゲス (Julia

Rodríguez) 現館長 (2014 年 1 月 7 日) に話したところ (2013 年 12 月に人事異動がおこなわれた由)、いずれも、シマンカス展示が「分析的 (analítico)」であるのに対して、インディアスのそれは「描写的 (descriptivo)」である旨評した。なお、シマンカス展示を準備した責任者が、展示開始当時学芸員であったロドリゲス現館長である。

- 15) 以下の表の中の () については、筆者自身が展示物の概要をまとめたものであり、全ての展示物を網羅しているわけではない。
- 16) 以下の一覧表は、シマンカス文書館作成の展示目録もとに、筆者がまとめたものである (Cf. Archivo General de Simancas, *op. cit.*)。この目録は同館ホームページからもダウンロードできる (http://www.mcu.es/archivos/Novedades/destacados_sol_naciente.html) [2014 年 1 月 26 日閲覧・確認]。この目録については、後掲のインディアス文書館のそれとともに、別稿で翻訳を予定している。
- 17) この天正遣欧使節がヴァリニャーノによる巧みな「外交戦術」であったことを克明に描き出した研究として、在リスボン・マカオ科学文化研究所研究員のコレイア (Pedro Lage Reis Correia) 氏の研究が重要である。Véase, Pedro Lage Reis Correia, *A Conceção de Missionação na Apologia de Valignano: Estudo sobre a Presença Jesuíta e Franciscana no Japão (1587-1597)*, Centro Científico e Cultural de Macau, I. P., Ministério da Ciência, Tecnologia e Ensino Superior, Lisboa, 2008.
- 18) ポルトガル王室の後継者の断絶によって、1580 年以降フェリペ二世はポルトガル王も兼ねていたことから、ポルトガル人中心のイエズス会によって進められた遣欧使節一行には、スペイン国王との謁見が予定されていた。
- 19) Archivo General de *Simancas*, *op. cit.*, p. 2.
- 20) *Ibid.*
- 21) *Ibid.*
- 22) 以下の記述は、同館のホームページで述べられている歴史的沿革 (<http://www.mcu.es/archivos/MC/AGI/Presentacion/Historia.html>) [2014 年 1 月 26 日閲覧] をもとにしている。
- 23) インディアス総合文書館がホームページ上に掲載している展示目録 (Archivo General de Indias, *EXPOSICIÓN DE JAPÓN A ROMA BUSCANDO EL SOL DE LA CRISTIANIDAD: LA EMBAJADA DE HASEKURA (1613-1620)*, Sevilla, 14 de junio a 15 de agosto de 2013) にもとづいている (http://www.mcu.es/archivos/Novedades/novedades_Destacados_AGI.html) [2014 年 2 月 21 日閲覧]。
- 24) 筆者が同館を訪問したのは 2013 年 7 月 8 日であったが、その際に対応してくれた本展示責任者の 1 人である学芸員ピラル・ラサロ・デ・ラ・エスコスラ (Pilar Lázaro de la Escosura) 女史は、今般の展示の開会式を、急遽、2013 年 6 月 14 日の日本の皇太子によるセビーリャ訪問に合わせることで決定され、展示を 2 ヶ月で準備しなければならず、

シマンカス総合文書館からも何点かの資料を借りた旨述べていた。

- 25) Archivo General de Indias, *op. cit.*, p. 1.
- 26) Archivo General de Indias, *op. cit.*, p. 2.
- 27) 参照、外務省外交史料館・在日スペイン大使館『特別展示日本とスペイン——外交史料に見る交流史展示資料解説』、3頁。
- 28) Emilio Sola, “España y Japón en el Siglo de Oro: Historia de un desencuentro”, en María Jesús Zamora Calvo (Editora), *Japón y España: acercamientos y desencuentros (siglos XVI y XVII)*, SATORI EDICIONES, Madrid, 2012, pp. 231-232.
 なお、シマンカス展示の第1部「4. グレゴリオ八世」のところには、当時のエンリケ・デ・グスマン駐ローマ大使からクリストーバル・デ・サラサル駐ベネチア代理大使に宛てた、国家事項およびローマ法王による使節一行の接受について述べる暗号化された書簡が展示されている（展示番号15）。同展示目録によれば、暗号化は「頻繁に取り交わされていた書簡の体で、慣習化した情報伝達システム（sistema habitual de transmisión de información）であった」（Cf. Archivo General de Simancas, *op. cit.*, pp. 28-29）。
- 29) Antonio de Nebrija, *Gramática de la Lengua Castellana*, volumen I, Edición facsimilar, Ediciones de Cultura Hispánica / Instituto de Cooperación Iberoamericana, Madrid, 1992, .a.í-a. íiii. なお、ネブリハがスペイン語見出しの辞書を最初に出版した人物である点について、参照、堀田英夫「スペイン語辞書の歴史——日本語との二言語辞書をめぐって——」愛知県立大学外国語学部『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』第43号（2011年）、171～196頁。
- 30) Emilio Sola, *op. cit.*, p. 232. ネブリハと帝国については、参照、五十嵐一成「A. ネブリハ『カスティーリャ語文法』と『帝国』」札幌大学経済・経営学会『経済と経営』第35巻2号（2005年）、239～244頁。
- 31) 例えば、徳川家康の落胤であった小笠原権之丞がディエゴの洗礼名をもつキリシタンであったことを、Lvyis Piñeyro, *Relacion del sucesso que tuvo nuestra Santa Fe en los Reynos del Japon, desde el año de seyscientos y doze hasta el de seyscientos y quinze, Imperando Cubosama*, Por la viuda de Alonso Martin de Balboa, Madrid, 1617から明らかにすることを試みたものとして、参照、大航海時代の戦国愛知研究会（愛知県立大学）編『大航海時代の戦国あいち——十六世紀前後の日欧史料から』（愛知県陶磁資料館企画展「戦国のあいち 信長の見た城館・陶磁・世界」第三展示部門冊子）、2012年、22～24頁（川畑執筆担当）、川畑博昭「大航海時代イベリア文書における『人民主権』の原理的意味——『近代法』再考のための『主権』の『抗議性』の復権のための覚書」『愛知県立大学文字文化財研究所年報』第6号（2013年3月）、1～23頁、同「異端者たちの多文化共生——愛知のキリシタンに見る『異文化理解』の作法」愛知県立大学歴史文化研究会編『大学的愛知ガイド』（昭和堂、近刊）。な

お、1617年に執筆されたルイス・ピニェイロによる同書は、当時のスペイン国王フェリペ三世に捧げる体裁をとっている。

- 32) 筆者も関わる、愛知県立大学学長特別研究費「大航海時代の戦国愛知」研究会（代表・上川通夫）の共同研究は、歴史学、地理学、文学、言語学、法学の分野からの試みの1つである。さしあたりの成果として、大航海時代の戦国愛知研究会（愛知県立大学）、前掲資料（2012年）がある。